
魔法少女リリカルなのは～目指せデバイスマスター～

叢真

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは〜目指せデバイスマスター〜

【Nコード】

N3827L

【作者名】

叢真

【あらすじ】

何故かリリカルなのはの世界に転生してしまった主人公。原作なんか知らないが自身の夢に向かって突き進め。『デバイスってネタの宝庫だよね?』

原作になるべく準拠する予定ですが、ご不快に思われる方はブラウザの を押すなり、携帯の戻るキーを押すなりをお勧めいたします。

第1話 二度目の人生はじめました（前書き）

他の作者さんたちの小説に影響され自身の小説書いて見ました。

文才が足らずご都合主義などもありますでしょうが宜しく願います。

第1話 二度目の人生はじめました

あ、ありのままに今起こった話を話すぜ！ いつも通り部屋で寝
ていて目を覚ますと赤ん坊になっていたぜ！ 夢や幻覚なんてちや
ちなもんじゃねえ転生の真髄を味わったぜ。

はい、2次創作で良くある転生ですね分かります……………って

「おぎやああああ！？（なんでさああああ！？）」

第1話

どうも皆さんおはこんばんにちわ。

何故か転生してしまい叫んでいたのがそろそろ懐かしくなります。

リアルコン君体験中のレザード・ウィンストンです。

第二の人生を歩み始め明日で4年たつ、精神年齢は三十路に突入
しました…orz

どうやら俺が転生？した世界はリリカルな世界らしいんだが原作
なんぞ殆ど知らない。

前世？ではプチオタクであったもののリリなのは全く見てなかつ

た。

まあ、友達に色々聞いてはいたがストーリー何かぜんぜん覚えておりませんし。

そもそ「おい、聞いているのかレド！」

毎度毎度、人の思考を遮るなこいつは…

「ごめん聞いたなかった。なに、ミニクロ？」

今、俺…レドって言うのは俺の愛称…の事呼んだのは幼馴染のクロノ・ハラウン…因みに同じ年で4歳。

同じ年の癖に俺よりかなりちびっ子いので親愛の情をこめて偶にミニクロと呼んでいる。

だって何かマイクロに語呂が似てるじゃん？…髪の毛も黒いし。

「クロノだ！！」

「はいはい、んで。何の話？」

ミニクロって言うと毎回訂正してくるんだがそんなに嫌なんだろうか？

結構可愛いと思うんだが……

「大きくなったら何になりたい？って話。」

「うーん、取りあえずは父さんみたいなデバイスマイスター。」

レガード・ウィンストン、ミッドチルダ式総合Bランクの魔導師で執務官補佐兼A級デバイスマイスター。

それが俺の自慢の父さん。

魔導師としてはたいした事は無いが技術者としては超がつくほどの一流で俺の憧れだ。

デバイスって色々とネタに使えそうだし是非ともなりたい職種である。

因みに母さんは、ライラ・ウィンストン、古代ベルカ式空戦SSランクの魔導師で執務官。

真紅の戦乙女とか管理局の赤い彗星とか呼ばれてる。

…へ、白い悪魔？

何かへんな電波を受信したがスルーする。

「そういうクロノはどうなのさ？」

「僕は父さんや母さんのように立派な提督になって管理局で次元世界の平和を守るんだ」

どうだすごいだろと言わんばかりに胸を張る。

クロノのお父さん、クライド・ハラオウンさんは俺の両親の上司で友達で、次元航行艦の艦長。

「おお〜すごい、すごい」

「そうだろすごいだろ」

適当にほめたら更に上機嫌になる。

「ま、互いに夢の為にがんばろうぜ」

「なら、どちらが早く夢を叶えるか競争だぞレド」

ふふ、そんな分の悪い賭けを持ち出して良いのかミニクロ？

俺が目指すのはデバイスマイスターでお前が目指すのは提督だぞ？

「競争するだけじゃ面白くないから何か賭けよう」

さあ、乗って来い。

「なら、負けた方が勝った方の言う事をひとつだけ聞くんだ」

くつくく、良いだろう。

俺の勝利は揺るがないがなあ。

「うん、それで良いよ」

にっこり笑顔で答える。

今の内からこいつに何をやらせるか考えておこつ…

「クロノ、レド君。昼ご飯の用意できたわよ？」

そう言つてドアから顔を覗かせるのは緑色の髪で額に印をもつおは…じゃなくてお姉さん。

「レド君、今何か失礼なこと考えなかった」ソナコトナイデス

ヨ。リンディさん」：そう、ならよろしい」

この人はリンディ・ハラウンさん。クロノのお母様で仕事で家を空けがちな両親に代わってよく面倒を見てくれる。

何故かちよくちよく俺の思考が読まれている気がするのは気のせいだと願いたい。

因みにだが俺の両親、クロノのお父さんは揃って一週間前から出張中。

というわけで俺は一週間前からハラウン家で生活中なのだ。

「それじゃ、二人ともご飯にしましょ」

リンディさんにつれられて部屋を出て行く。

二度目の人生、まだ始まったばかりだけど俺は幸せだ。

第1話 二度目の人生はじめました（後書き）

自身の妄想がとまらず気がつけば書いていました。

なのはとかの幼馴染は多いですが主人公はクロノの幼馴染にしてみました。

非才ではありますが完結できるようがんばって生きたいと思います。

誤字脱字、感想、アドバイス等ございましたら宜しく願います。

5 / 2 6 主人公の年齢を変更しました。 時系列的におかしかったので

第2話 残されるもの達（前書き）

はい、第2話です。

ちよつと駆け足気味となりますが早いところ原作介入したいので一寸飛ばします。

第2話 残されるもの達

その連絡を受けたとき俺とクロノ、リンディさんは楽しい夕食の最中だった。

モニターの向こうに移るのはグレアムおじさんで内容は至極単純。

…俺の両親とクライドさんが死んだ。

一瞬グレアムおじさんが何を言ってるのか理解できなかった。

グレアムおじさんとリンディさんが何か話していたが俺の脳はそれらをノイズとしか認識しない。

…死んだ？
そうだよ

…誰が？
俺の両親が

…嘘だ
真実だ

自身がそれを理解すると同時に俺の意識は落ちた。

第2話 残されたもの達

俺が目を覚めたのはそれから一週間後で病院のベッドの上だった。

担当医が言うには心的ショックで眠り続けていたらしい。

取りあえずリンディさんには目茶目茶泣かれました。

葬式などの手続きはすべてグレアムおじさんが行なってくれていた。

「……ただいま」

もう少し入院していた方が良いと言われたが半ば無理やりに退院して自分の家に帰ってきた。

分かっていただけだけど誰も迎えてくれる人などは居ない。
改めて実感してしまうと心が軋んだ

人気のない廊下を進み階段を上がると突き当たりの部屋に入る。

中には様々なパーツの置かれた台と中央には作業代と端末。

父さんの仕事部屋だ。

もっともって教えて欲しい事があった。

父さんの作業している姿がすごくかつこ良かった。

デバイスについて話すときの父さんは子供みたいだったけど輝いていた。

深夜まで父さんとデバイスについて話していて母さんに怒られる。

でも母さんの顔は怒りよりもしょうがないなあという苦笑いで…

『ピンポーン』

来客を知らせるインターフォンにあわてて玄関まで下りる。

ドアを開けばリンディさんとグレアムおじさんが立っていた。

リビングに通して来客用のソファアに座る。

「あ、お茶入れますね」

「いや、気にしないでくれたまえ。今日は君に渡す物があつてね」

「そうよ、お茶なら私が用意するからレド君は座っていて頂戴」

キッチンに向かおうとしたらグレアムおじさんに止められリンディさんに仕事をとられた

「あれ、そう言えばクロノは？」

今更ながらにクロノが居ないことに気づいた。

リンディさんが居るからあいつ一人で留守番なんてさせないと思うんだけど…

「ああ、彼はロツテとアリアをお願いして面倒を見てもらっているよ」

ああ、あの二人か…何度かあった事が在るけど玩具にされた記憶しかない。

「御愁傷様、クロノ」

骨は俺が拾ってやるからな。
精々遊ばれている。

「でだ、今日来たのは君に渡す物が在る」

渡す物？
なんだろ

「レガード君とライラ君から預かった物さ」

「父さんと母さんから？」

グレアムおじさんが取り出ししたのは小さな箱だった。

「開けて見なさい」

箱を開けると中には青い宝石

「これはデバイス？」

「うむ、詳しいことは彼女に聞くと良い」

「彼女？」

『はじめましてマスター・レザード』

「君は？」

『私は試作総合兵装型インテリジェントデバイス。開発コード【アーカイバ】です。マイスター・レガードによって製作されました』

「父さんの！？」

『はい、詳しい事はマイスター・レガードよりメッセージをお預かりしています。再生いたしますか？』

「ああ、頼む」

数回コアが点滅すると【アーカイバ】から空間ディスプレイが投影された。

しばらく砂嵐が続き画面が落ち着くと

「父さんに母さん！？」

そこには両親が映っていた。

『レド、この映像を見ているということは無事に彼女は届いたのね？』

『誕生日おめでとうレド』

「誕生日？」

…そう言えば忘れてたけど俺4歳になったんだっけ？

『本当なら直接渡したかったんだが申し訳ない事に仕事が忙しくてね。リンディに渡すようお願いして誕生日当日に届くようにさせてもらったよ。』

『パーティーは私たちが帰ったらすごいのを開くから楽しみにしていてね?』

『さて、彼女【アーカイバ】なんだがレドのデバイスだ。とはいえ待機状態のみで魔法も基本的なものしか登録していない』

『あなたは将来デバイスマスターになりたがっていたからあえてこういうデバイスにしたわ』

『【アーカイバ】は待機状態のみしか搭載してない分、高度な処理能力と膨大な保存容量を誇る少々特殊なデバイスだ』

ふむ、良く分からない。

もっと簡単に説明してくれ

『まあ、簡単に言えばデバイスのコアのみで四　元ポケットみたいな物よ』

なるほどね。

だから【アーカイバ（倉庫）】なのか

『分からない事があれば【アーカイバ】に聞いてくれれば良い』

『じゃあ、レド早く帰るからいい子で待っていてね?』

『あと、【アーカイバ】に名前をつけてくれると嬉しい』

へ？【アーカイバ】って名前じゃないのこいつ？

『【アーカイバ】はあくまで開発コードだからね』

名前ね…何がいいかな

『私たちが帰るまでに名前をつけておくのよ？』

『レド、改めて誕生日おめでとう。』

父さんの言葉を最後に画面は再び砂嵐へと戻った。

『以上がマイスター・レガードからのメッセージです』

空間ディスプレイを閉じると【アーカイバ】が話し出す。

「おう、ありがとくな。」

なんというか嬉しかった。

「それでだが、レザード君。君の今後の生活だがどうするかね？」

「僕の今後ですか？」

「そうだ、リンディ君とも話したのだが君には身よりも無いし良ければ私かリンディ君が引き取りたいんだが…」

「それであなたに選んでもらおうって話になってね」

リンディさんがお茶を持って帰ってきた。

「俺としては別にここで一人暮「ダメよ」……」

俺の言葉を遮ってリンディさんがすばらしい笑顔で却下してくる。
一人の方が楽何だけどなあ……

「嫌でも一人「ダメです」……」

負けないもん

「一人「ダメ」……」

ま、負けないもん!!

「ひと「選えびなさい」……」

まけな……

「ひ「私とグレアム提督どちらが良いかしら？」……グレアムおじさんでお願いします」

ま、負けた……orz

「ふむ、では私が保護責任者、リンディ君が後見人ということではないかな？」

グレアムおじさんが苦笑いしながら尋ねてくる。
ちくしょうちよっとは助けてくれてもいいじゃないかよ。

リンディさんは自分が選ばれると思っていたらしく驚き顔。
因みにグレアムおじさんを選んだ理由はリンディさんが時折目茶
目茶怖いから。

「はい、それで願います」

「ああ、宜しくお願いするよレザード君」

そう言つて手を差し出すおじさん。

「はい、よろしくおねがいします」

俺も手を差し出して握手。

おじさんの手はごつごつしていたけどとても暖かった。

その隣でリンディさんが若干悔しそうにしていたのは気にしない
…気にしないったら気にしないのっ！

こうして俺はグレアムおじさんの下で生活する事になった。

その夜、グレアムおじさんの計らいで今日一晩はこの家で寝る事
にもらった。

あの後、燃え尽きたクロノがロツテさんとアリアさんに連れて来
られて。

そのまま我が家での夕飯となった。

で、今現在俺は自室で悩んでいる。

「なあ、【アーカイバ】」

『はい、マスター・レザード』

【アーカイバ】の名前についてだ。

さすがに「お前はどんな名前が良い？」なんて聞けないのでどうした物かと考える。

「お前の性能って結局何が出来るの？」

『それは私の使用方法などについてでよろしいでしょうか？』

「うん、それで良いや。分かりやすく教えてくれると助かる」

『かしこまりました。まず、私自身の性能ですが私には待機状態しかありませんがバリアジャケット等の補助魔法の行使は可能です。インテリジェントタイプのブーストデバイスだと考えていただければ助かります』

「なるほど」

『マイスター・レガードは私を司令核とし複数のデバイスを使用する事を目的としていたようです。』

「ようするにお前がいくつかのデバイスを管理して戦況に応じてデバイスを変更して戦うと？」

『はい、その通りです。』

面白いな。

確かにこの方法なら戦略の幅がグンと広がる。

『現在私が管理しているデバイスは、非人格搭載型アームドデバイスの【ヴァイサーガ】のみとなります。』

「ヴァイサーガ？」

まさかどこそのロボット大戦に出てくるアレか？

『はい、近距離戦対応の騎士剣であり。斬撃、刺突、打撃魔法に優れています。カートリッジはシリンドクタータイプ。装填弾数六発です。製作者はマイスター・レガードですが発案者はライラ様で彼女のアームドデバイス【ヴァルキリー】を元に製作されました。』

…恐るべきマイファザー。

まさか父さんも転生者だったりして……………まさかね。

まあ、それならそれでこいつの名前は決まったな。

「よし、決まった」

『なにがでしょうか？マスター・レガード』

「お前の名前は【ラミア】だ」

『了解しました現時刻を持って私の名称は【ラミア】とします。ありがとうございますマスター・レガード』

「あとそのマスター・レザードって言うの止めてくれねえ?」

うん、どこぞのジエダイみたいで背中がむず痒い。

…ライトセイバーも面白そうかも。

『では、なんとお呼びすれば?』

「レドでもレザードでもマスターでも良いぞ?」

『では、マスター・レドとお呼び「レドだ」…了解。レドとお呼びします』

「おう、よろしく頼むぜ。【ラミア】」

うん、マスター・ とか呼ばれるのが嫌だっぺ言えは良かった

『不束者ですが未永くよろしくお願ひします。レド』

「ちょ、誰にそんなの習った!?」

『ライラ様ですが何か?』

第2話 残されるもの達（後書き）

作者自身かなり駆け足な気がいたしますが原作まではこんな感じで進んで生きたいと思います。

レドの心理描写がなかなか安定してい無いような気がします。まあ、本人の正確だと思っていただけると助かります。

では、また次話でお会いしましょう。

感想、アドバイス、誤字脱字等ございましたらお願いします。

第3話 修行と勉強それとネタ作り（前書き）

お久しぶりですしばらく時間が取れず時話投稿がかなり遅れてしまいました。

第3話 修行と勉強それとネタ作り

俺がグレアムおじさんに引き取られてはや2年たちます。

「ほらほらまだまだ行くよっ!!」

「ちょっ、アリアもう無理!!」

今年で6歳になるレザード・ウィンストン現在修行中DETH。
内容はいたって簡単でアリアが放つ誘導弾を延延と避け続けるだけ。

ロツテ?

今頃クロノで遊んでるかクロノをフルボッコにしてるようっせ

《レド前方から来ます》

ラミアからの指示を聞きながらも前方から向かってくる誘導弾を上半身を捻る事で避け

《続いて左から》

「あいよっ!!」

左から来るのは一步後退して避け

《後方から来ますよ》

「ホイッ」と

後ろから来るのを右に飛んで避ける。

この訓練、地獄のような辛さだが効率はすこぶる良い。

ラミアとのコンビネーションと状況判断、体力強化と一石三鳥である。

魔法を使用せず最小限の動きで避け続けること間もなく30分。
最初は誘導弾の数も少なくスピードもゆっくりだったが時間経過
に比例して数は増え、スピードも増加。
後半は殆ど無酸素運動に近い。

俺のライフが限りなく0になろうとした時

ジリリリイリリリッ！！

漸く終了のアラームが鳴り響いた。

第3話 修行と勉強それとネタ作り

「っ、疲れた」

その場に座り込んで大きく息を吐く。

「お疲れ、レド」

そう言っただけでタオルとドリンクを手渡してくるリーゼアリア。
俺のお師匠様その一である。

「あんがとアリア」

タオルで汗を拭きつつドリンクに口をつける。
よく冷えたドリンクがのどを潤おしてく。

「それにしてもクロノもだけどレドも筋が良いわね」

「んあ？」

「今やってる訓練。日に日に誘導弾の数とスピード増えてるのに気づいてる？」

「そうなのラミア？」

《はい、最初の頃に比べて被弾率がかなり落ちています》

胸元の青い宝石が点滅しながら答える。

「ほんと筋が良いよレドは資質も悪くないし、いつそのこと本気で武装隊とか目指してみる？」

「うーん、とりあえずはデバイスマスター資格取るのが最優先かな？平行してトレーニングは続けるけど」

うん、とりあえずはこれが最優先。

その後のことを考えるのは後だ。

ちなみに俺の魔力資質が上の下らしく最終的にはAAA位までは行くのではないかと言う話だ。

ミッド式の魔法には適性が低いため近代ベルカ式が俺の魔法スタイルとなる。

「それならデバイスマスターの勉強一本に絞ったほうが効率はよくないかな？」

「それもそうなんだけど。ラミアとかヴァイサーが折角なら使いこなせるようになりたいし。俺は自身のデバイスすら使いこなせずに何がデバイスマイスターかって考えてるし？」

デバイスマイスターとは名の通りデバイスを習得するものだが俺の目指すものは強いて言ううならデバイス「マスター」つまりはデバイスを習得、極めるものである。

デバイスを作るだけでは極めたとは言えず作り出したデバイスを使いこなしてこそ極めたといえる。

それが俺の目指す【デバイスマスター】である。
そのためには日々の鍛錬と勉強が大事なのだよ。

「欲張りね」

「そうだよ、俺は欲張りなの。やりたい事が一杯あるから大変だ」

苦笑いのアリアに苦笑いで返す。

「そう、それじゃ君のやりたいことのためにお姉さんが一肌脱いで上げる」

「よろしくお願いします」

「さあ、次は私との模擬戦行くよ？」

「じゃあっお願いします。いくぞラミア！！バリアジャケット展開と同時にヴァイサーガスタンバイ」

《了解しました。バリアジャケット展開、ヴァイサーガスタンバイ》

ラミアの返事と同時に光が俺を包み込む。

俺のバリアジャケット……つまりは騎士甲冑は

エリが起ててある黒のインナーに、タイトな赤いラインが入った黒のズボン。

ジャケットは赤のジャケットで裾は短めで袖や裾に黒のライン。両腕とも長袖。

黒と赤の穴あきグローブ

そして足首まである赤い腰布に黒い編み上げのブーツ。

ラミアはそのまま変化無し。青いペンダント。

イメージとしてはどこぞの背徳の炎と弓兵を足して2で割った感じ。

騎士甲冑の展開が終わると目前に鞘に収められた片刃の剣が現れる。

それを鞘ごと掴んで腰に装着。

これが俺の戦闘体制だ。

ちなみにこのバリアジャケット、何種類か色のパターンがある。

今展開してるのが《赤と黒》のver2Pで他には《青と白》がver1Pなど。

後、使用するデバイスによってBJは変更予定。

「相変わらず格好だけは一人前ね。その身長だと衣装負けするわよ？」

「ふん、後数年もすれば衣装に負けなくらいのイケメンになって

るからいいんだよ」

そうだよ、あと10年もすれば衣装が似合う良い男になってるはずなんだ…

自意識過剰？

知らんわ、両親共に美形だから俺も美形になるの…なるったらなるの…！

「はいはい、ルールはいつも通り。時間制限30分以内に私に一撃入れるか、最後まで立ってるかよ？」

「一撃どころか倒してやる」

「カートリッジシステムの使用は禁止、OK？」

「了解」

カートリッジシステムの使用は絶賛禁止中だ。

今だ第一次成長期すら終わっていない俺の体と安定化していないリンカーコアに掛かる負担が大き過ぎるためラミアとの会議の結果、15歳まで封印することとなった。

「それでは、はじめ…！」

アリアの合図と共にヴァイサーガを構えて俺は飛び出した…

「…知ってる天井だ。」

気がつけば、俺がいるのはグレアム亭の自室

つい先ほどまでアリアと模擬戦してたんだが何故に俺はベットでお休み中？ why？

《目が覚めましたかレド？》

声の先にはサイドテーブルに置かれた我が相棒ことラミア

「なんで俺、ベットで寝てたのさ？アリアとの模擬戦は？」

《覚えてないのですか？アリアさんとの模擬戦は開始30秒でレドのTKO負けでしたよ？》

早っ

開始30秒とか一瞬じゃないかよ

確か、開始と同時にアリアの正面まで移動して“フラッシュ”による目潰し、“ソニッククムープ”で背後に回り込んでヴァイサーガで斬りかかろうとしたところで……あれ？

そこから先の記憶がポツカリありませんよ？

「もしかしてカウンター喰らってそのまま撃沈した？」

《はい、その通りです。アリアさん曰く予想外の攻撃でしたので思わず本気で攻撃してしまったとのことですよ》

「“フラッシュ” 見せるのは初めてだったからなあ、とはいえエリアに本気を出させたんなら十分使えるね」

“フラッシュ” とはその名の通り閃光を発するオリジナル魔法因みに発案は俺、術式作成はラミアだ。

魔力スフィアを形成しそのまま炸裂させるといったって単純な術式だが発動も早く、魔力消費量も低いので使い勝手は上々
難点は攻撃力が皆無であるため目くらまし程度にしか使えないことだがそもそも攻撃用の魔法として開発してないので問題はない

《はい、初見ならばほぼ確実に通用すると思われます。近接戦闘ならば非常に有効であるかと…》

「そついえば今日の修行は？」

《本日はこれで終了とのことですよ》

それは僥倖これで残りはデバイスマイスター資格の勉強とネタ作じゃなくてデバイスの原案を考えられる。

「よし、それじゃこのままマイスター資格の勉強に入るか」

《了解しました。私はスリープモードに入りますので何かあればお呼びください》

そう言うとラミアは数回点滅した後静かになった

「さてと、始めますかね」

ベットから降り机に向かうとマイスター資格用の教材を開く
目標は2年以内のA級マイスター資格の取得だ。

さて、なんだかんだで勉強も終え夕食を食しその後のネタづ…原案
作り中です。

「やっぱり遠距離攻撃用のデバイスは必要だよなあ…」

ネタ…じゃなくて原案ノートを広げつつ呟く。

《しかしレドの魔力適正では砲撃魔法習得は難しいですよ?》

ラミアの言うとおり俺の砲撃魔法の適性は限りなく低い、というよ
り砲撃、射撃等の遠距離魔法の適性が低い。

近接<<移動<防御<<補助<<誘導制御型射撃<<<直射型射撃
<<<<越えられない壁<<<<砲撃

というバリバリな近接タイプの魔導師である。

「となると、射撃魔法特化のデバイスかあ…「レド、S2Uの整備
を頼めるか?」ノックぐらいしようねクロノ」

ノックもせずにクロノが部屋に入ってくる。

一緒の家に住んでいるわけではないがリンディさんの仕事関係のた
め週に1回ほどのペースでクロノはグレアム亭にて泊っていく。

リンディさんも今は一時的に後方勤務へと回っているが仕事量が多いらしく稀にクロノはうちに預けられるというわけだ。

「別にいいけど、俺じゃなくて専門の人に頼んだ方がいいんじゃないの？」

クロノからデバイス【S2U】を受け取る

以前にS2Uを参考代わりに見せてもらって自己流でなんちゃって整備したらその後からこうやってちよくちよく頼まれるようになったわけだが…

いいのかなぁ俺まだマイスター資格取ってないんだけど

「レドの腕は信頼できるってアリアが言ってたから大丈夫だ!!」

「さよけ…」

そつやり取りをしながらS2Uを待機状態のままチェックする。

「ラミア、スキャン開始」

《了解》

ラミアのコアが数回点滅しS2Uのスキャンを開始する

これには10分ほど時間がかかるのでその間にクロノと雑談に入る
ふむ、どうせならこいつにアドバイスでも聞いてみるか子供の方が頭は柔らかいからな

「なあ、なあクロノ」

「何だレド？」

「遠くの敵を攻撃する武器って何かあるか？」

「ブレイズキャノンで攻撃する！！」

ノーシンキングで答えてくれた。

「それだと魔法だろ？俺が言ってるの剣とか槍とかの武器だ」

こいつ今の知力で執務官になれんかね？お兄さんは心配ですよ？

「剣や、槍を投げる！！」

数秒考えての回答

「よし、よし、もう少し考えてから答えろ。それだと投げた後に自分の武器が無くなるだろうが…まだ敵がいたらどうするのさ？」

「別の剣で戦う！！」

「……OK、OK。俺の訊き方が悪かった。自分の持つてる武器を投げないで相手に攻撃するにはどんな武器を使えばいい？」

これは俺の訊き方が悪いんだ…クロノがちょっぴり弱いわけではないでも、この方法は在りだ魔力で作成した剣を分投げての攻撃は使えるし爆発とかするようにすれば遠距離でもある程度対応できるな。

「じゃあ弓だ！！」

しばらくうんうん唸っていたが名案が浮かんだとばかりに胸を張って答えてくれた。

「なるほど弓か……！？…ナイス案だクロノ。それ採用ね」

ちようどいい原案があるじゃないか…近接をヴァイサーガにするなら遠距離はこいつしかない！

「よっしゃ、決まりだー！！」

手にペンを持ちスラスラとノートへと書き込んでいく
どうせならラミア繋がりであれも作ろう…オリジナル性には欠ける
がこいつらなら使い方も把握できるしバランスも良い

「はっはあー！！最高にハイってやつだあー！！」

夜のグレアム亭に俺の奇声が響いた。

若干クロノが引いている気がするが知らん俺の溢れだすパッション
は止まらないぜー！！

当然この後気持ちよく睡眠中だったアリアに怒られたのは言うまでもない。

夜9時に睡眠とかどんだけか思ったら拳骨されました。

《レド、S2Uの解析終了しました》

アリアにプレゼントされたたんごぶに涙を浮かべていると電子音とともにラミアが解析の終了を教えてくれた

「サンキュ、こっちに回して」

《了解》

目の前に空間モニターが立ち上がりS2Uのデータが映し出される

「んゝ特に大きな損傷はなさそうだな…これくらいなら自己修復モードで何とかなるなあ…ただ、ところどころ魔力滓があるから一度近いうちにちゃんとしたオーバーホールやった方がいいかもな」

「じゃ、オーバーホールもやってくれ!!」

「いやいや、無理だから」

今の俺に出来るのは整備の真似事だけ、ましてや専用の機材すらないのにオーバーホールなんぞできません。

しかもS2Uはクライドさんの形見、やってみて失敗して壊しました何ぞシャレにならんわ。

「じゃあ、レドがデバイスマイスターになったら僕の専属マイスターになってくれ!!」

何とも気が早いことで…

「はん、執務官になってからスカウトしに来い。そしたらお前のデバイスの面倒見てやるよ」

そう言いながらS2Uをクロノに手渡す

「よし、約束だぞ!!僕が執務官になったら君には僕の補佐官をや

ってもらっからな!!」

俺がらS2Uを受け取りクロノは息巻いて部屋から出ていく

あるれえ?なんでデバイスの整備やるって答えたのにあいつの補佐官やることになってんだ?

「まあ、いいか。」

どうせ冗談だろうと思っていたがこのとき訂正しなかったことが後々俺を厄介なことに巻き込んで行くのはこの時の俺は知る由もなかった

第3話 修行と勉強それとネタ作り（後書き）

前書きでも言いましたがお久しぶりです。

リアルが忙しいのと自身の文才の無さのため3カ月近く放置してしまい申し訳ありません。

忙しさは落ち着きましたので更新頑張りたいと思います。

誤字脱字、感想お待ちしております

第4話 題名考えるのそろそろあきらめようかと（前書き）

またまた。お久しぶりです。

お待たせいたしました第4話です。

PV10,000 ユニーク3,000 超えました。

ありがとうございます。

第4話 題名考えるのそろそろあきらめようかと

《ついに完成しましたね?》

「うん、これで完成つと」

やあ、皆さんお元気かい?

二年ほど前にA級デバイスマイスター資格を取得したレザード・ウインストンです。

ようやく11歳になりました。

時間が飛びすぎだつて?

ここ数年デバイス関連の勉強とロッテ+アリアと訓練しかしてないから問題ないんです。

現在俺がいるのは実家の地下室。

長年開かずの間とされていた部屋だがつい先日父さんの書斎にて鍵を発見。

地下に降りてみてびっくり、何とあのお父様自宅に研究室というか工房持っていましたよ。

おかげで長年制作していたデバイスがついに完成、これでミドルレンジでクロノといい勝負ができますようになります。

クロノは現在、今年の執務官試験に向けて猛勉強中で士官学校で頑張っている模様。

あ、ちなみに俺とクロノ二人揃って既にアリアとロッテからは卒業しました。

何故か最後まで一緒に修行してかったけどね、なんでもお師匠様二人で賭けを企画内容は最後に模擬戦をやらせてどっちが勝つかのこと

ちなみにその時は俺が圧勝、開始と同時に魔力スフィアばらまいて“フラッシュ”を発動そのまま背後に回り込んでヴァイサーガを後頭部に直撃で終了でした。

半年ほど前まで愚直バカだったのだがアリアにいじめられた成果が落ち着いて行動できるようになった。

おかげで最近模擬戦で勝てない、ミドル〜ロングレンジからの攻撃でいやらしく戦うようになってしまった。

勝率は大体30%くらい。

だがついに完成したこいつらのおかげで50%くらいにはなると思う。

《今のレドだと精々、4割くらいが限界でしょう》

「む、何で요ミア? てかモノローグにつつままないでくれないかな」

己はいつの間に読唇術まで覚えやがった?

《だって、あなたここ半年ほど魔法関係の訓練やってませんよね?

ほぼ毎日朝から晩まで工房に籠もってた事を想定すれば当然でしょう？」

「一応。マルチタスクで仮想訓練はやってたよ？」

《そこは否定しませんが身体能力結構落ちてますよ？半年前まではぎりぎりAランクくらいの実力が今はBランクですよ？》

「まあ、何とかなるでしょ？しばらく工房に籠もるつもりもないし。こいつらも使いこなせるようにならないと……」

目の前の二つのデバイス。

ロングレンジとミドルレンジでの戦闘に特化して作り上げたAI非搭載型のアームデバイス。

アンジュルグとアシュセイヴァー

アンジュルグは大型弓で完全に長距離用。

クロスレンジでの戦闘力は皆無だが強力な射撃魔法の行使が可能となった。

アシュセイヴァーは初期の段階では銃型にするつもりだったが、ミドルレンジでの戦闘をメインとするために結局は銃と剣二つの機能を使用できるようにしたら

Kな主人公機の武器とほとんど同じに……ステアードに改名するべきだろうか

アシュセイヴァーは火力不足の可能性があるためフルドライブも搭載予定。

《これでとりあえずはオールレンジで立回れるようになりますね?》

「だな、これでアリアに近接バカと言われないですむ」

近距離特化のヴァイサーガ、遠距離特化のアンジュルグ、バランスタイプのアシュセイヴァー

この三機をメインに戦う予定なのだが…使いこなせるのかが問題だ。

《早速、訓練しますか? 私とのリンクも終了してるのですぐにでも使えますよ?》

「動作検証は済んでるから、あとは実践での使い勝手と確認だね。」

《クロノさんから模擬戦のラブコールが届いてましたから。近いうちに対戦なさってはとうです?》

「うん、それ模擬戦だけじゃなくて補佐官のラブコールも混ざってるよね?」

俺がマイスター資格を取得した後クロノからの勧誘が非常にしつこい何故か奴の頭の中では俺が補佐官になるのは決定事項らしく3日に一度メールが一週間に一度通信が掛かってくる

《補佐官の資格試験受けてみたらどうです?》

「そりゃあ。デバイスマイスター資格取るよりも簡単そうだけど。」

俺法律関係苦手なんだよ」

しかし、腹減ったな何か作るかね。

ちようど昼飯時だし…

地下室から出て、キッチンへと移動しますか。

《またまた、クロノさんには興味ないとか言っておいてしっかりその手の問題集隠しているのは知ってますよ？》

「そりゃ、資格関係は持つてて損はないから。」

うん、これは本当だ。

この世界【ミッドチルダ】での就職年齢は地球に比べると恐ろしく低い。

俺ぐらいの年で働いている連中は少くない。

元に俺はフリーのデバイスマイスターであり、嘱託魔導師として働いている。

因みに魔導師ランクは空戦B。

地上本部、本局からは是非技術部へなんてスカウトもされるけど、まだまだ色々勉強したいのと自身のデバイスが出来上がっていないのを理由にすべてお断りしている。

《期間限定でお受けしてあげたらどうですか？》

「そうだなあ。とはいえ15歳になるまではカートリッジ使えない

から魔導師としての戦力そんな高くないぜ？」

会話しながらも手は休めません。

んゝ何か食いもん食いもん…お、パスタ発見。

確か、冷蔵庫にベーコンとケチャップ、ピーマンがあったはず。

《それは、あなたが訓練しないからでしょう？元に魔力ランクだけならA Aクラスですよ？》

「ナポリタンでいいか…」

《ちょっと、ひとの話聞いてくださいよ！！》

「ちゃんと聞いてますって…デバイスのくせにひとの話とは…お、今上手いこといったか俺？」

《言えてません！！》

等といいながらも深いお鍋に水をためて火をかける。

「ま、しばらくはのんびり行かさ。囑託続けながらね」

とか言ってる通信が掛かる。

「あん？またクロノか？」

端末を確認するとそこにはもう一人のしつこい奴の名前。

「ジーザス…」

《取らなくて良いんですか？下手をするとここまで押し付けてきますよ？》

流石に家にまで来られると非常に非常にめんどくさい事になるので嫌々だが通信を開く。

当然 SOUND ONLY で

「はい」

『あ、わたしわたし』

「俺にはわたしわたしなんて知り合いはいません」

それだけ言つと通信を叩き切る。
後ついでに着信拒否だな。
俺は飯食いたいだよ。

「さ、そろそろ湧いたかな？」

『いきなり通信切るなんてひどいよね!!』

お鍋の中身を確認しようとしたら目の前に空間ディスプレイが立ち上がった。

「ジーザス…」

《相変わらず無駄に高性能ですねマリエルさん》

「あのね、問答無用でこっちにハッキングして通信繋ぐのはひどくないマリエル？」

『私にかかればこれくらいちよちよいのちよいよ』

ディスプレイに映るタレ眉メガネはマリエル・アテンザ。

本局技術部所属のメカニックマイスターでデバイスから機械類はなんでもござれのスーパー工学女。

2年前に知り合って以来俺をしつこくスカウトしてくる。

「悪いけど技術部に入るつもりはないよ？」

『そうそう諦めるつもりはないよ？きみくらいの実力があるなら絶対について引き込みたいからね』

「はいはい。んで、今日は何の用さ？悪いけど俺今から飯なの、腹

ぺこなの、OK?」

『じゃあ、お姉さんがお昼ご飯奢ったげるからちよつと出てこない?』

「非常に魅力的な提案だけでも……何企んでるのかな?」

《あなたが奢ってくれるなんて恐いんですけど?》

絶対碌でもないことを頼まれるに違いない。

『二人揃ってひどいね!!ちよつと相談事があるだけだよ!!』

「あん?珍しいねマリエルが相談事なんて、何。男でもできた?」

『無い無いゝたとえ男が言い寄ってきてもお断りよ。今のところは仕事が恋人で十分』

おいおい、13歳で既にワーカーホリックと申すか。

《マリエルさんあなたその考え方だと一生独り身になりますよ?》

『大丈夫、いざとなったらレド君に貰ってもらうから』

なんて言いながらウィンクしやがった。

「金積まれてもお断りだよ」

『ま、とりあえず地上本部まで来ない？今丁度こっちに来てるんだ』

俺の皮肉もなんのその軽く流してそのまま話し出す。

「まあ、飯奢ってくれるとの事だからしょうがないから行ってあげよう」

とりあえずつけたコンロの火を消す。

お湯湧いてなくてよかった〜これで飯代が浮くね。

『ただけ上から目線なのさ君は！！まったくそれじゃ、地上本部のロビーで待つてるからよろしくね』

「あいよ、それじゃ後でな」

着替えてラミアの格納領域にアンジュルグとアシュセイバーを仕舞う

《何ですかね相談事って？》

「デバイス関係のことじゃないか？」

《また、面白みのない回答を…案外告白だったらどうします？》

「ない、ない。」

身支度を整えて家を出た

「んで、相談事って何さ？」

現在グラナガンのファミレスにて食後のコーヒーブレイク中です。
いやあ、美味かった。余は満腹じゃ。

遠慮なく注文したから若干マリエル涙目だったけど…良いじゃん高い給料もらってるんだから。

「うん、実はこれなんだ…」

目の前に食後のティータイム中のマリエルが俺の前に空間ディスプレイを立ち上げる。

何々…

「魔導師の戦力強化？」

「そ、管理局の慢性的な人員不足及び魔導師不足は知ってるよね？」

「一応な、て言うか魔導師の戦力強化って…」

無理じゃね？

ある程度なら努力で何とかなるけど魔法の威力なんか所詮は力押し…つまりところ個々の魔力資質に依存するわけだし。

《魔法の威力は魔力量に依存しますから難しくないですか？》

「ラミアの言うとおり何だけどさあ…」

マリエルは大きなため息をついてカップを戻す。

「しょうがないじゃない…地上本部と本局からの連名なんだもん」

つまり上からの命令だから何とかしろと…

「というわけでなんかいい案出して」

「また無茶ぶりを…お前に考え付かないもんが俺に考えられると？」

うゝむ…

「フルドライブシステムとかどうよ？」

「難しいと思うよ…フルドライブシステムなんて魔力ありきのこり押しだし。」

「だよなあ……」

《デバイスや術者にも程度はあれ負担がかかりますしね》

高ランク魔導師じゃないと数分も持たずにガス欠だな。

「なら一時的なリミットブレイクは？」

「ベルカ式ならいいかもね……それでも連発はできないんじゃない？」

とりあえずこれは保留。

《カートリッジシステムはどうでしょう？成人の方ならば負担はかかりませんがそこまで重いものではないですし》

「ミッド式デバイスにカートリッジシステム積むのか、理論的には可能だけど……その場合はミッド式のカートリッジシステムの開発から始めないとだめか？」

「だね、試験的にベルガ式でやってみてもいいと思うけど……その場合は基礎フレームからの設計にしないと……」

「ああ、アームデバイスと違ってストレージやインテリジェントデバイスはもろいからなあ……」

「特にインテリジェントデバイスは繊細だから……」

「でもいい案ではあるんだよなあ……カートリッジシステムの魔力変換効率とか上昇できるようにするだけでも効果あるよな？」

「となると、カートリッジそのものも改良しないといけないね」

《私のように、コアとデバイスを分離した形での使用は？》

「無理無理、コスト掛かり過ぎるわ…ワンオフならそれでいいけど量産には向かん」

「魔力変換技能に特化させるのは？」

「量産できるならともかくこれもコスト掛かるべ？」

まあ、変換特化型のデバイスは面白そうだけど。
多分恐ろしく金掛かるぞ…

そのまま三人であーでもないこーでもないと議論を続ける。

結果…

「それじゃ、俺はミッド式カートリッジシステムと魔力変換効率のUPの研究」

「私は基礎フレームと処理速度の上昇担当だね」

あるれえ？

「なんで俺も開発参加することになってんだよー!!」

マリエルとの議論に熱くなり過ぎて気付かなかったけど俺も参加するの！？

「ええ、良いじゃん私と本局で頑張ろうよ」

「ヤダ、本局とか絶対にヤダ」

「なんでそんなに嫌がるかなあ……」

《マリエルさん、この人の後見人と保護者誰だかお忘れですか？》

「グレーム提督にハラOWN提督……なるほど」

俺が本局に行きたがらない事情を察してくれたらしく苦笑いを浮かべる。

「しつこいんだよ……リンディさんとそのお友達のレティ提督が……」

レティ提督はそんなでもないけどリンディさんが非常に非常にしつこい。

技術部じゃなくて武装隊への勧誘が……俺あくまでデバイスマスターがいいんだけど……一応戦えるけど。

「おじさんはそうでも無くて助かってるんだけど……」

グレームおじさんは基本的に俺の事由にすればいいと言ってくれるので非常に助かる。

ロツテとアリアも何も言ってこないし。

《もしこの人が本局の技術局に配属されてみてください……あの手に

の手で武装隊、もしくは次元航行艦に配属されます』

「十中八九非常戦力として扱っよね…」

あ、やばい泣きそう。

「あははは…」

マリエルどん引き。

「そ、それじゃ地上本部ならどうか？今回のプロジェクトは本局・地上本部合同なんだ」

確かに地上本部ならリンディさんの権力も届かないけど…

「非常勤でもいいなら…俺自身魔導師としての訓練もおろそかにしたくない」

「それならどこかの部隊に技術官として行ってみる？訓練もできるし開発もできるよ…！」

「助かるけど、マリエル地上本部にパイプあるの？」

うん、俺結構我儘なこと言ってるけど大丈夫なのか？

「むふふ、技術部なめたらあきませんよ。本局と地上本部は確かに仲が悪いけど技術部は別、互いに魔導師の命を預かるような仕事してるんだから技術提供し合っって少しでも落ちる人を少なくするために頑張ってるの」

「へえ、すごいな」

「13年くらい前かな？何でも一人のデバイスマスターのおかげらしいよ」

すごいなその人。まさに開発者の鏡といった感じた。

「というわけなんで、技術部経由でお願いすれば問題なし」

「じゃ、そういうことで頼むわ《レド》どーしたラミア？」

よかったこれでリンディさんから逃げられる。

一安心したところで既に冷めてしまったコーヒーをグビリ。

《時間はよろしいのですか？》

「ほえ？」

そう言つて店内に時計を見ると…

「20時!？」

確か飯食い終わって話し出したのが…14時くらいだから

「6時間も話してたのか俺ら!？」

いやあ、時間がたつの早すぎる。

技術的な会話になるとあつという間に時間が過ぎていくなあ…

《いえ、そう言うことではなくて。》

「にしてもそろそろ帰らないと………ジーザス」

《思い出されましたか?》

「あ、もしかして何か予定あった?」

うん、あったよ予定…今日はグレアム亭で四人そろってのご飯する約束が…

おじさんたちが出張から戻ってきたから久しぶりにご飯食べようって誘われてた。

アリアとロツテが腕によりをかけておいしい物作るって…確か時間は20時。

「ごめん、マリエル。今日はこれで帰る、詳しいことはまた今度でっ…!」

「うん、またねレド君」

マリエルに挨拶して慌てて店を出る。

ヤバイヤバイヤバイヤバイ

「なんでもっと早く言わないのさ!」

グレアム亭へと向かい爆走しながらラミアに文句を言ってやる。

《私が何度か伝えようとしたのに「今良いところなんだから後にしろ」って言ったのはレドじゃないですか!」

「畜生、もう間に合わん、転送するぞ!」

《駄目に決まってるでしょう!! そもそも転送魔法なんてほとんど練習してない癖に何言ってますか!!》

「っち、しょうがない飛ぶぞ!!」

《そもそも、市街地での魔法使用は禁止されてます!! もうあきらめて怒られてください!!》

「不幸だああ!!」

《自業自得です》

あははは、行っちゃったなあ…

ラミアと一緒に慌てて帰って行ったレド君の後姿を見送りつつ冷めきった紅茶を飲む。

彼と初めて出会ったのは二年前、A級デバイスマイスター試験の会場。

てっきり自分が最年少受験者だと思ってたら自分より小さい子供がいて驚いたのが第一印象。

二度目に会ったのは合格発表の時でその時はじめて彼に声をかけた。

話してみると見た眼とは裏腹にすごく大人びていて二人でデバイス談議に花を咲かせたことは懐かしい。

てっきり技術部に入ると思っていたけどフリーのデバイスマスターをやるって聞いて勿体ないと思った。

ことデバイスに関してなら彼は私以上に詳しかったから…だからアドレスを聞いて頻繁に技術部に勧誘した。

最初のころは比較的丁寧な口調だったのが一月経つ頃には砕けた口調になって印象が変わった。

変に大人びているんだけどときどき見せる年相応少年の顔がグッと来たりして…偶にハイテンションになり過ぎて壊れるけど。

勧誘を口実にして週に一度くらいお話しするのが楽しみになったりして…弟みたいな、友達みたいな？

中々美少年だから今のうちにキープしておくのもいいかもしれないなんて考えたり。

「おかしいなあ…私年上趣味だったんだけど…」

まあ、この辺りはそんな気にすることでもないか…

「でもレド君気づいてるのかなあ…」

地上部隊に技術官として配属されても魔導師として訓練したら多分非常戦力とカウントされると思っただけど…

「まあ、でも良いか」

そのことに気付いた時のリアクションを想像すると自然と笑みがこぼれた。

夜、めずらしく彼のほうから連絡があったときは頭に大きなたんこぶを二つ作っていた。

涙目にちよつとドキツとしたのは私だけの秘密。

第4話 題名考えるのそろそろあきらめようかと（後書き）

今回はなかなかの文字数を記録。

毎回これくらいの分量になるよう頑張ります。

感想・アドバイスおまちしてます。

第5話 ついにキタ、念願の射撃魔法（前書き）

お待たせして申し訳ありませんでした

第5話 ついにキタ、念願の射撃魔法

さて、地上部隊にデバイスマイスターとして所属することに決まったわけだがその前にやる必要がある。

クロノおよびリンディさんへの報告だ。

グレアムおじさんと、ロツテアリアには報告済みで三人とも頑張れと応援してくれたわけなんだが・・・

現在俺がいるのは本局の通路。

クロノへの報告は執務官試験が終わってからにしようと思っている。今下手に報告して間近に迫った執務官試験に落ちられてもシャレにならん。

目的の部屋の前まで到着したのだがハッキリ言って…

「帰りたい…」

《ほらほら面倒なことは早く終わらせてしましましょう》

「へいへい」

ラミアに促されて渋々、部屋のインターフォンを押す。

『はい』

「レザードです」

『待つてたわよレド君、どつぞ』

「失礼しまゝす」

部屋の主に許可をもらって部屋に入るわけだが…うわあ

“めっちゃめっちゃ笑顔ですね”

“絶対勘違いしてる”

“まあ、頑張ってください私はスリープモードに入りますから”

“ず、ずるいぞラミア!!”

“……………”

畜生、本当にスリープしやがった。

「ふふ、待つていたわよレド君。」

部屋の一角に用意された接客用のソファーに互いに腰掛ける。

「コーヒーでいいかしら?」

「あ、どもです」

「それで、今日は管理局への入局ということでもいいのかしら?」

「ええ、非常勤という形ですけど。一時的に技術官として働こうか

と…」

非常勤という言葉聞いてリンディさんが一瞬固まったけど気にせず一気に報告する。」

「配属先はまだ決まっていなくてもいいですけど。地上本部の部隊になると思います。」

「そう、わかったわ。」

・・・あれ？

「怒らないんですか？」

うん、俺はてつきり【陸】で働くなんて許しませんと言われるとばかり。

「あら？怒られたいのかしらレッド君は？」

「いや、リンディさんしつこく入局迫ってたからてつきり海で仕事させる気満々なのかと」

「そうね、できれば海に来てほしいのが本音。」

そうやって弧ひーに角砂糖を一つまた一つまた一つまた一つ…

「って、砂糖入れ過ぎっ!？」

「そう？たくさん入れる方がおいしのよ？」

「限度つてもんがあります！」

うん、結局全部で10個近く角砂糖入れたよこの人。

見てるだけで胸やけしそうなコーヒーとか初めて見たよ。

「とはいえレド君が自分で決めたのなら私から言うことは特にないわ、頑張つてね」

《あれだけレドをしつこく本局に誘っておいていざレドが地上本部で働くことになったら頑張れとか何を企んでおいでですかリンディ提督？》

うんうん、ここまですんなり行くと何考えてるのか怖いよね…

………

“ って、ラミアはスリープ入ったんじゃないの！？ ”

“ いや、とりあえず狸寝入りしてました。リンディさんが何を企んでるのか非常に気になりますし ”

“ なら、最初から教えておいてくれもいいじゃんかよ！ ”

“ 駄目ですよ、そんなことしたらあなためんどくさがって全部私にやらせるじゃないですか ”

残念、バレてたか

「実はグレアム提督から本人の意思を尊重するようにくぎを刺されちゃったのよ」

「グレアムおじさんが？」

あるれえ？

俺グレアムおじさんにはリンディさんがしつこいとか愚痴った記憶はないんだけどなあ…何で知ってんのあの人？

“アレじゃないですか以前一度、ロツテさんとアリアさんに愚痴ってましたよね？”

ああ…そういえばマイスター資格修得してからあまりにスカウトが激しいから愚痴ったような気もする

“うん、とりあえず俺の思考読んで念話入れるのやめてくれないかな？恐いから…”

“顔に書いてありますよ？”

“俺そんなに顔に出やすいか？”

“いえいえ、せいぜい分かるのは私とグレアム提督ぐらいじゃないでしょうか？ロツテさんとアリアさんも気づくかもしれませんね”

つまりは身内連中にはバレバレなのか

《なるほど、それで合点がいました》

「とまあ、そういうわけなので本局で働きたくなったらいつでも連絡してくれると嬉しいわ」

「まあ、考えておきますけど。武装隊にはいきませんからね！」

「あら、残念」

しつこく勧誘するのはやめてくれるみたいだけどなんと云うか勧誘自体はやめてくれそうにない。
そのうち会った時に勧誘されて断るのが挨拶みたいになりそう。

「クロノにはまだ伝えていないのかしら？」

「ええ、執務官試験前ですから。」

ぶっちゃけると、試験に落ちたら落ちたで助かるのだが。
クロノの夢を知ってる俺としては応援する気持ちの方が強い、補佐官はやらないけど。

「このまえ話したら、「レドを補佐官にして何事件をバンバン解決する」といって張り切ってたわよ？」

「あいつの頭ん中では俺が補佐官やるの決定事項ですか」

前言撤回やっぱり落ちろ、俺は補佐官やらないからな！！

「ああ見えてあの子はしつこいから頑張ってね」

《頑張ってくださいね、レド》

「リンディさんはともかくなんでラミアまで他人事あつかい!？」

《いや、私個人の意見としてはレドが魔導師として前線に出たら当然私の仕事が増えるわけでして》

「とどのつまりどっちでも良いと?」

《YES、Master》

こんな時だけ主人扱いすんなコラ。

「ふふ、ラミアもかなり人間味が出てきたわね?」

《稼働年数もそろそろ6年ですし、レドは暇があれば常に私と会話してくれますからね》

「良いことじゃない、少なくとも私は無愛想なインテリジェントデバイスよりもいいと思うわよ?」

《ありがとうございます、リンディ提督》

「魔導師としてもデバイスマイスターとしても俺の大事な相棒ですからね」

しばらく他愛のない話をしてリンディさんの部屋を出た。

しばらく歩き到着したのは本局自慢の訓練施設。

「悪い、待ったか？」

「あ、思ってたよりも早かったね」

そこで待ち合わせていたマリエルと合流した。

「しかし悪いな、付き合ってもらって」

「なんのなんの、レド君からの頼み事なんて珍しいからね」

《というのは建前で本音は新型デバイス見たからですよね？》

「そうそう、実はそうなの」

そこは嘘でもいいから否定してほしかった。

さて、薄々気づいてると思うが今回訓練場で行うのは新型デバイスの動作検証テストです。

本来ならアリアかロツテにお願いする予定だったが、グレアムおじさんが忙しいらしくそのお手伝いに二人揃って狩り出されているため急遽マリエルにお願いした。

他の魔導師からの意見も欲しかったのだが残念ながら知り合いに魔導師はいないのであきらめ、同じデバイスマイスター資格を持つマリエルの出番というわけだ。

あん？クロノ？

あいつに手の内見せるわけないじゃん。
クロノがアンジュルグとアシュセイヴァーを見るとき「俺の勝利と
いう方程式が成り立たないからな。」

「はあ、まあいいけどね」

《おしゃべりはこのくらいにして早速始めますか？》

「だな、マリエル」

「OK、測定器その他もろもろ準備できてるよ」

そう言つてマリエルが端末を操作するとホログラムが立ち上がり殺
風景な訓練施設が一瞬で街中になる。

「ラミア、セットアップ」

《Set up》

光に包まれると同時にバリアジャケットが展開される。

本日のカラーは青と白のver1P

「続いて、アンジュルグスタンバイ」

《アンジュルグスタンバイ》

左手に大型の弓が、右腕に銀色のガントレットが出現する。

「へえ、それが射撃特化のデバイス？」

「正確には直射射撃特化だ」

全容量の7割を直射射撃魔法用の専用プログラムと処理に費やし、残りの3割を誘導制御魔法用に回した。

デバイスとしての完成度性能ともに申し分ないが一般魔導師からすればイカれているとしか言えないデバイスである。

《完全に射撃魔法を使うためだけのデバイスですね》

『ターゲットスフィア数は10機、フィールドは都市、ランクB。スタート』

マリエルの合図と同時に10機のスフィアが出現し半分は浮遊、残りの半分は不規則に動き始める

「久しぶりの訓練だけといけるなラミア？」

左手のアンジュルグを握りなおす。

《当然です。むしろそのセリフそっくりお返ししますよ？》

「上等だ、行くぞー！」

かりそめの空へと飛び出した。

「まずは直射型で浮いてるのを落とす！」

《了解》

「イリユージョン・アロー」

アンジュルグを構え、魔力で編まれた弦を引く。
同時に俺の魔力により矢が形成されて……

「狙いは…外さん!!」

《Fire》

ターゲットスフィアを打ち抜いた。

やっぱりいいなあ、射撃魔法それも念願の直射型。

今までの射撃魔法と言ったらヴァイサーガの烈火刃（誘導制御型）
と斬撃飛ばす地斬疾空閃だけ。

作ってよかったアンジュルグ。

因みに今更だけど俺の魔力光は緑だ。

《感動するのは後にして次に行ってください!!》

「あいよお!!」

次のターゲットスフィアを狙い。

「シャドウランサー!!」

右腕のガントレットを向けると先端に小型の魔力スフィアが形成され
銃状の魔力弾が無数に発射。

そのまま複数のターゲットスフィアを打ち抜く。

…ヤバい、射撃魔法楽しすぎる。

「次い！！誘導制御型行くぞっ！！」

《了解しました》

「ステインガー」

動いているターゲットスフィアを狙い

《arrow》

イリユージョン・アローよりやや短めの矢がスフィアを追いかけ、
追い詰め、貫いた。

「ラミア、アンジュルグの状態は？」

《すべて予測値以内です。問題ありません》

つまりは動作にも今のところ問題無か。

「よし、アレも使うぞ」

《良いんですか？カートリッジの使用無しではイリユージョン・ア
ローに毛が生えた程度の威力ですよ？》

「チャージ時間増やせば威力は出るだろ？どうせ、使うことになる
んだから一応データ取っておきたい」

《わかりました》

今の俺に打てる最大出力の射撃魔法、本来ならカートリッジ使用によることで短時間で打つ魔法だが一回くらいは撃っておきたい。

「リミット解除…コード・ファントムフェニックス!!」

アンジュルグを構えて限界まで弓を引き絞る

《チャージ開始します》

少しずつ魔力がチャージされていき矢が緑色に輝く。

「って、長いなオイ!!」

《本来ならカートリッジ使用が前提なんですから当たり前です!!》

うん、まあ覚悟してたけどここまで長いとは思わなかったよ。

こりゃ実戦での使用は無理だな。

《……………チャージ完了しました》

「あいよ!」

残りのスフィアが一直線に並ぶ瞬間を狙って矢を放つ。

「いつけえ!!」

《Phantom phoenix》

放たれたファントムフェニックスはスフィアを飲み込んだ。

自分で術式組んでおいてなんだけどここまで高威力な魔法だったか?

…ま、いつか。

アンジュルグが排熱を行い、蒸気が排出される。

「全ターゲット撃破…ってか?アンジュルグに不具合は?」

《特に大きな問題はありません、ただ最後のファントムフェニックスは早々連発できそうにないですよ?》

そこはまあ、予想してた。
足り無い資質をデバイスでカバーしてるから負担が馬鹿にならないんだよなあ

《今ので大体カートリッジ5発分の魔力ですけど》

なるほどそれなら今の高威力にも納と…はあっ!?

「おま、カートリッジ5発って理論値限界じゃ!？」

《動作検証なんですから限界の威力出さないでどうするんですか?》

「そりゃ、そうだけど。先に教えてくれよ」

《あなた途中でビビってチャージ完了前に撃つでしょ?》

………うん、壊れたら嫌だから撃つね多分。

「さ、次はアシュセイヴァーだな」

《このヘタレ》

何とでもいえ、折角作つたのに速攻で壊れたら泣くわ。

『データ取りはバッチリだよ、早速見る?』

「いや、このままもうアシュセイヴァーの方も動作検証やるわ」

マリエルと会話しながらも一応、アンジュルグの状態を軽くチェック

ク。

『りようかゝい、条件は今のままでいいのかな?』

「スフィアの数半分に減らしてくれ」

うん、ラミアの言うとおり特に大きなダメージはないな。
これなら十分実戦で利用できる。

『はいはい、他に何かご要望は?』

「最後に2機だけ大型スフィア出してもらえる?」

『ん、準備できたよ?』

「ラミア、アシュセイヴァーを」

《了解、アンジュルグ格納。アシュセイヴァースタンバイ》

左手のアンジュルグが消えると同時に右手にソードモードのアシュセイヴァーが現れる。

『じゃ、始めるよ』

先ほどとは半数のスフィアが出現する。

まずは1つ目

飛行しながらすれ違いざまに横一文字で切りつける。

「ラミア！」

《S o n i c M o v e》

ソニックムーブで移動しアシュセイヴァーを逆手に持ちかえて下から切り上げる。

「アシュセイヴァー、ガンモード」

《了解》

片側の刃がスライドしてトリガーとグリップが出現、銃口が開く。くるりと一回転させてグリップを握りトリガーを引く。

「ショット!!」

魔力弾を生成して発射。

大きく弧を描いてターゲットスフィアに衝突。

「アクセルシューター!!」

先端に6つの魔力弾を形成し

「シュート!!」

それぞれ違う弧を描き2つのスフィアに3発ずつ衝突。

うん、思った以上に使いやすい。

刃の部分は魔力の通りもいいし切れ味もそこそこ、射撃魔法は誘導制御も楽で魔力弾生成も早い。

やはり3機の中では一番バランスがいいな。

《大型スファイア、2基来ます》

「よし、砲撃魔法行くぞ！」

《了解、チャージ開始します》

アシュセイヴアーの先端に魔力がチャージされる…

「やっぱり長いな。」

《これも本来ならカートリッジ使用前提ですからね、15歳になるまでは我慢してください》

やっぱり実戦じゃ使用できそうにないなあ

《実際問題カートリッジ使用しても精々がAランク程度の威力なんですけどね》

「まあ、そこはロマンだよ…それにほら、切れる札は多い方がいいしね」

《確かに良くも悪くもワイルドカードになり得ますけど……使う機会ありますか？》

「無いなら無いで良いんだよ。」

《あ、チャージ完了しました撃てますよ？》

「いくぜえ!!」

「ハルバートオ《Buster》」

緑色の極太レーザーが大型スフィアを飲み込んだ。

「よし、威力も申し分なし」

我がお師匠ですら匙を投げた俺の砲撃魔法だがとりあえずは撃てた。デバイスマスターでよかった（涙）

魔力ランクA Aなのに…いろいろ小細工してAランクの砲撃が限界……どうせならチート補正が欲しかった。

《残存スフィア、残り1です》

「アシユセイヴァー・ソードモード」

銃としての機能を格納して再び剣として使用可能にする。

出来ることならカートリッジ使用でやりたいんだが……
アシュセイヴァーの刀身に魔力を薄く硬くコーティングしていく。
ヴァイサーガの術式プログラムを応用して作りだした、専用の近接魔法。

「ブレイブスラッシュー!!」

最後の大型スフィアを唐竹でたたつ切る!

「我に断てぬ物無し」

《どこの悪を断つ人ですかあなたは…》

何で知ってんのラミア?

俺お前に教えたか?

『全ターゲットスフィア、撃墜完了。お疲れ様』

「わざわざ手伝ってもらって悪かったな、マリエル」

『そう思っなら後で、アンジュルグとアシュセイヴァーばらさせて
?。』

だから目をそんなにキラキラさせんな…

「別にいいけど、ちゃんと戻してくれよ?」

『それじゃ、私の部屋で検証するから移動開始』

……ちゃんと戻してくれるよね？

で、訓練施設から移動してマリエルの仕事部屋に移動。

この女、自分の研究室持つてるんですよ。

何でも俺も参加する魔導師強化プロジェクトの本局側の責任者に任命されたとのことで自分のオフィスをゲットしたとのこと

「……汚い」

《これがかたずけられない女という奴でしょうか？》

そこそこの広さをもった部屋なのだが非常に汚い。

床には丸めた紙や途中まで書きあげた設計図が散乱しており
デスクにも大量の設計図とコピーカップ

「あはは、昨日遅くまで仕事してて、片付けるの面倒だったもんだから」

参った参ったなどといいながら手早く片付け始める。

「……こいつはデバイスの基礎フレーム？」

落ちていた設計図を拾って目を通す。

《それにしても、やけに頑丈に作ってありますね》

こいつは…なるほど。

こないだ話していたカートリッジシステム搭載予定の基礎フレームが

「何とか、軽くて丈夫、柔軟な基礎フレームにしたいんだけどこれ
がなかなか曲者でねえ」

「また、こたわるな。」

《レドだつてアンジュルグとアシュセイヴァー作つてるとき偉いこ
だわつてましたよ?》

確かに、設計図かなり書いてたっけ?

「やるからには完ぺきを求める、それがプロよ」

メガネを光らせて胸を張るのはいいんだが………その胸じゃなあ

【ゴツンッ】

「つてえなおい!!」

グーで殴られた

「今私の胸見て残念とか思ったでしょ!?わ、私だつてまだ若いん
だからこれからもっと大きくなるの!」

顔真っ赤にして若干涙ぐんでも恐くないぞ

あとやるんなら11歳の少年じゃなくてもっと大人にやった方がい
いぞ

「へいへい。さ、データ検証始めんぞ」

「いつか絶対、ダイナマイトボデイになって悩殺するんだから」

出来るもんならやってみる

さて、気を取り直して本日動作検証を行ったデータを立ち上げてソファアーに座って検証開始！

「さて、まずはアンジュルグなんだけど…」

《ファントムフェニックスの魔力ランクはAAA威力射程ともに申し分なしです。》

「問題はカートリッジ無しだとチャージ時間がかかり過ぎること…あの威力叩きだすのに必要な時間が約5分」

カートリッジ5発分で300秒ってことは1発分のチャージが約1分カートリッジ使用なら15秒くらいか？

「完全に奇襲用だね、もうあきらめてカートリッジ使えば？」

《今のレドですとカートリッジの使用をお勧めできません》

「やっぱり体にかかる負担？」

《はい、一時成長期が終わっていない状態でのカートリッジ使用は多少とはいえ影響が出てくるはずです》

「ピンチな時の切り札ってことで使用は基本的に無しだな」

《私の許可がないと使用できなくしておきますからね!!》

「イリユージョン・アローとステインガー・アロー、シャドウランサーは特に問題なしかな？」

マリエルがアンジュルグで使用した魔法のデータを見比べる。

「だな、速度、威力ともに問題なし。」

イリユージョン・アローがAランクで劣化版ファントムフェニックス、ステインガー・アローはBランクでステインガースナイプの改良版、

シャドウランサーはフォトンランサーの応用でBランク、連射性と貫通性重視の弾幕魔法。

《そしてこちらが、動作前と動作後のアンジュルグのデータです》

「魔力素の残骸もほとんど無いし、部品の損傷もなし。しっかり馴染んでるな」

「ソフト面も術式プログラムにエラーも無いね」

アンジュルグは特に問題なしで良いのかな？

《次にアシュセイヴァーですが……これは》

「ん〜ちよつとねえ」

「やっぱあのギミックは問題があったか…」

上から、ラミア、マリエル、俺である。

「まさかたった一度の使用でここまで損傷するとは…」

モニターに立ち上がるのはアシュセイヴァーの動作前と後のデータだが…

動作後のデータの至る所にダメージを受けている。

「欲張り過ぎだね、砲撃魔法と最後の斬撃魔法でオーバーホールが必要だよ？」

《特に最後のブレイブスラッシュですね》

グリップとトリガーとカートリッジシステムを搭載したせいで若干強度に不安が残ったんだよなあ
何とかいけると思ってただけど…フレームが歪むとは思わなかった。

多分このまま使い続けてれば後二、三回でぶっ壊れる。

「うっう…力作だったのに…」

グッバイ制作時間約2年

あ、なんか目から汗が…

あちゃー、なんだか泣き出しそうなんだけど。

あ、どうもマリエル・アテンザです。

アシユセイヴァーの不具合のためレド君は見たことないほど凹んでしまいました。

（ちょっと、ラミア。何とかしてよ）

（無理ですよ、実際問題こういった欠陥があるのは事実なんですし）

（大事な相棒なんだから励まして）

（マリエルさんここは年上の包容力で慰めてくださいよ）

（一人じゃ無理だって、ラミアも手伝ってね）

って、泣き出しちゃった

（ラ、ラミア！？）

（しょうがないですねえ）

（なんでそんなに偉そうなのかな！？）

二人揃ってコソコソ話す

「で、でもほら。射撃魔法と砲撃魔法は特にダメージもないし？」

《そ、そうですよ。グリップを外付けにして銃剣型にしてしまえば
フレイムも強化できますし?》

「ラ、ラミアの言う通りだって誘導制御や、魔力収束は非常にいい
んだし。斬撃魔法は封印してしまえばちゃんと近接でも使えるって
!」

「……ほんと?」

涙目!?

破壊力抜群です。

《ほんとですよ?軽く計算しましたが、銃剣にしてしまえばその分
フレイムを強化できます。そうなればある程度は剣としても使用可
能です。刃の部分も切れ味はいいですから、うまく改良すればブレ
イブスラッシュほど強力な斬撃魔法は打てませんがAランククラス
のものならなんとかなりそうですよ?》

「私も改良手伝ってあげるから、ね?」

《マリエルさんもそう言ってますから、頑張りましょう。前例が無
いフレイムタイプですし不具合はどうしても起きてしまいます》

「……そうだな、失敗作とも言えないし。今回は勉強させてもらっ
たと思って次回に活かそう」

うんうんいつもの調子が戻ってきたみたい

やっぱりレド君はこうじゃないと

…アシュセイバー

ディスプレイに立ち上がっているアシュセイヴァーの基礎フレーム
設計図

損傷のためところどころ赤くなってるけど……ミッド式デバイスと
して使う場合を考える

カートリッジは外付けにして、周辺を補強できればベストとまでは
いかないけどベターじゃないかな

頭の中で簡単に設計図を思い浮かべる

うん、悪くない

後は材質……コストを抑えた上に柔軟性を持たせることができれば
……

近いうちに一度資材開発部と話さないといけないかなあ

現状の資材でも良いけどそれ以上の物が使えるなら多分……

「レド君」

「ん？何さマリエル？」

「アシュセイヴァーのフレーム使わせて貰っても良いかな？」

「ミッド式のに使うの？」

うん、やっぱりレド君は察しがいい。

「……別にかまわないけど、多分…柔軟性と強度足りないよ？」

《材料自体は現在使用されているものを使いましたからね》

「うん、妥協するつもりはないから大丈夫。コレを雛型として可能な限り高性能なものに仕上げたいんだ」

私は技術官だもん

簡単に妥協なんてしてやらない

目指すのは次期量産型の試作デバイス、限られたコストの中で最高のものを作り出す。

それが今の私の仕事だ

「良いね、それでこそマリエルだよ」

ニヤリと口元を綻ばせて、レド君はうれしそうに笑う

「それなら、今後も定期的に話し合うか？互いに情報交換も必要だし俺もマリエルに相談したいことがあると思うし」

「あ、いいねそれ」

「そうだな、次から奇数月はマリエルところで偶数月は俺んとこでどう？」

「OK、OK」

これが今後何年も続いていくことは私もレド君もラミアもまだ知る由もなかった

第5話 ついにキタ、念願の射撃魔法（後書き）

アレ？おかしいなあ

本来チヨイ役の予定のマリエルが見事にヒロイン候補に！？

まあ、いいかw

感想、誤字指摘等のアドバイスありましたらよろしくお願いします

第6話 魔導師として技術者として

「さあ、今日も元気に頑張りましたよね!!」

「お断りします!!」

放たれた拳を体を右に傾けることで辛うじてよけ…って掠ったよ!!?

髪の毛がチツとかいってはじけ飛びましたけどオオ!!

やあ、レザード・ウィンストンです

なんだかんだで地上本部で仕事を始めて2週間ほどたつ、今更だが俺のお仕事はミッド式カートリッジシステムの開発と魔力効率上昇の研究。

重要な事だからもう一回言っけど俺の仕事は研究と開発ね?

ちくしょう、何が悲しくてシューティングアーツやら模擬戦やらなきゃなんのだ…しかも格上と

そう事の始まりは10日前…

「ほら、よそ見しちゃだめよっ」と

回想は後でね!

「ラミアッ!!」

《Protection》

緑に輝くプロテクションが相手の拳を受け止める

「ぐぬぬぬぬ」

拳とバリアが拮抗しているように見えるが少しずつ拳が俺へと向かってくる…

「甘い！カートリッジロード！！」

ナックル型のデバイスが薬莢を排出してタービンが回り…

「リボルバーマグナムツ！！」

「ゲツ！？」

即座に後ろに飛ぶと同時に

「トライシールド！！」

《Tri Shield》

開いている左腕にシールドを展開しリボルバーマグナムの威力を利用して更に距離を離す

向こうが態勢を立て直す前に一撃を繰り出すため飛行魔法の応用で即座に態勢を立て直し

ヴァイサーガを上段から…

「《地斬…》」

振り下ろすっ！！

「《…疾空閃》」

直撃を気にせず更に

「烈火刃！！」《fire！！》

緑の刃が四種類の軌跡を描いて相手に迫り…
着弾と同時に爆発した

「やったか？」

集中を切らさず爆煙が少しずつ晴れる先をみる
………しまった！！

《レッド》

「なんだよ…」

分かってるから言っなよ？頼むから言ってくれるなよ？

《それは、相手の生存フラグをばっちり立ててますよ？》

だから分かってるってえの！！

「はん、もとかからアレで倒れるような人じゃねえー」

うん、ちよつとはこれで終われば良いなあゝなんて思ったけど元々あまり期待はしてなかったから問題ない

《……ホントに？》

うるさいね！！つい、気を抜いて言っちゃったんだからしょうがないじゃねえか！！

「ふうゝ危ない危ない」

煙の向こうから紫の髪をなびかせ彼女は…クイントさんは無傷で姿を現した

《どうやらギリギリで防御されてしまったようですね》

「一発くらいは通ってくれても良いじゃんかよ…」

大きく息を吐きヴァイサーガを構える

時刻はそろそろ昼…飯も食べたいし、本来の仕事もしたい

「ラミア、アレでケリ着けんぞ…」

《了解》

「来なさいレド君」

こちらの雰囲気を感じ取ったのかクイントさんは腰を落として迎撃姿勢を取った

「真っ向勝負!!」

今の俺ができる最速の速さでヴァイサーガを振るい、地斬疾空閃を放つ…とヴァイサーガを前方に突き出し……爆発的に加速魔力でコーティングされた最速の突きを突き出す!!

「《風・刃・一・貫!!!》」

クイントさんが防御魔法を展開するが一瞬の均衡の後その防御ごとクイントさんを貫いた…

「いやあ、まさか10日間で一撃入れられるとはおねーさんびくっりよ」

「むしろあの一撃で直撃じゃないのがおにーさんびくりです」

《あの一撃で倒せないレッドにおかーさんは驚きです》

誰がおかーさんかコラ

模擬戦も無事に終了して現在時刻が午後一時、ちょっと遅めの昼食中です

模擬戦の結果は俺の勝ち…試合に勝って勝負に負けた感じだけどルールは簡単で、俺がクイントさんに一撃入れるかノックアウトされるか時間いっぱい逃げ切るかのどれかである。

「しつかし…モグモグ…普通…モグモグ…あの状態から…ングング…避けます?」

《行儀が悪いですよ?》

ラミア、いつから俺のおかーさんになった?

「アレは避けたというより逸らしたのよ」

…おお、ジーザス
なんで俺が一人前の Pasta 食うより早く三人前食い終わってるのこの人?

《逸らしたですか?》

「そ、あの最後に使った魔法…風刃一貫だっけ? あの魔法は一点突破で防御ごと貫く技だよね?」

「はい」

風刃一貫はクイントさんが言うとおり、防御ごと相手をぶち貫く
刺突技

実際のところは風刃閃同様、魔力コーティングされたヴァイサー
ガで突き刺すだけだ

カートリッジシステムを封印中の俺が考え出した苦肉の策である

《なるほど、防御魔法を半円状で展開したんですね》

「そうよん、さすがラミアちゃん。正確には展開位置を若干ずらし
てだけだねん」

つまるところ風刃一貫は……欠陥魔法？

「着眼点は面白いからまだまだ改良の余地ありってところかしら」

むう…どうしたものか

「隊長に相談してみたらどう？」

「ゼスト隊長にですか？」

「そ、隊長は獲物が槍だし、いろいろ聞いてみるといいわよ」

確かにゼスト隊長のデバイスは槍型だけでも…ありやどちらかと
いえば槍よりも青竜円月刀でしょうよ

「今度暇見つけて聞いてみます」

「そっしなさい」

と駄弁りながら昼食も無事に終わったのでそのままクイントさんと別れて仕事に向かうわけですよ

さて、今日はどこから片づけるかね

「さてと」

自分に与えられた研究室で食後のコーヒブレイクをしつつ端末を起動させる

マリエルほど広い部屋ではないものの俺も専用の研究室が与えられたので遠慮なく我が城とさせてもらってる

《試作型の図面は上がってますけど…》

「まあ、一応ね……」

でもこれは流石に……ひどいよなあ

《とりあえず、ベルガ式のシステム適当に持ってきただけですからね》

「だよなあ」

流石にこれは無い とはいえ、恐らくこのままでも十分使える…
…使えるけど多分デバイスが持たないんだよね

インテリジェントデバイスは繊細だから

「ある程度調整は必要としてやっぱりこれじゃ面白くないよなあ」

《カートリッジの口径を小さくしてみてはどうです?》

ふむ

小口径にすることでデバイス、術者に掛かる負担を軽減
高火力の魔法を使う場合はカートリッジのロード回数を増やせば…

アレ? 悪くないんじゃない? …

となると…システム自体は、現状のベルガ式をベースに改良して、
試作機は拳銃みたいにしてみようか…

「ラミア、口径はどれくらいが最もバランスがいい?」

《そうですね、レドが使う場合を前提として直径 0・40〜0・4
5インチが妥当では?》

「その場合のカートリッジによるブーストはどんなもんよ?」

《しばらくお待ちください》

コアが点滅すると同時に目の前の端末が動き出し計算していく

《一般武装隊員が使用するとして約1・2→1・4倍の上昇でしょうが、現状のベルガ式カートリッジシステムで約1・8倍であることを考えれば十分かと？》

「なるほど問題はなさそうだな……」

「んでもこれって現状の技術で簡単にできることなんだよなあ……
ついでに効率があまり良くない……魔法を行使するたびにカートリッジをロードしてたらアツという間にカートリッジ切れを起こすんじゃない」

「駄目だ、もう一度ゼロから考え直すぞ」

そもそもカートリッジシステムの運用方法は

- ？ ・ 魔導師の保有魔力量増加
- ？ ・ 行使魔法の不足魔力の補填
- ？ ・ 魔法の発動に要する魔力供給時間の短縮
- ？ ・ 圧縮魔力を利用した魔法の行使

の四種類

？はある魔法に必要な魔力を10としたとき、事前にカートリッジに込められた魔力を用いて9を補い残り1の魔力を行使者が供給する、というような運用法

ここにおいての1の魔力とは、魔力操作・制御のための魔力であるいわばダイナマイトの火種のようなものであり、カートリッジの含有魔力量を把握していなければ、当然魔法行使は失敗に至る

魔力の扱いは相応の精密・綿密な技術が必要であり、不慣れな者がカートリッジロードの度に相当の精神力、ひいては体力までも消耗することは珍しくない

？は？が魔法行使時間の延長を目的としているのに対し、より上級の魔法を扱うことに主眼を置いたといえる

高位魔法の発動に必要とされる供給魔力の不足分をカートリッジによって補填する運用法

高位魔法の操作・制御が出来なければまず叶わない運用方法である

？はベルカ式魔法が近接系魔法による個人戦闘に特化していることから、長時間の詠唱やいわゆる「溜め」、広範囲に及ぶ大規模魔法などを戦闘に組み込むことが難しい

とはいえ現状のカートリッジシステムの主な運用はこれが一番多い無理やり供給時間を短縮し、魔法を発動させる運用法である

本来の過程を踏まない発動であるため魔法の精度は低下するが、近接戦闘においても隙を生じさせない魔法行使としては有力であると考えられる

？は通常の魔力出力量では発動させることの出来ない、大量の魔

力を必要とする魔法の行使を目的に運用すること

カートリッジシステムの搭載・使用を前提とした魔法の行使であり乱用出来ず、瞬間的・限定的ではあるが、通常の数倍の出力をはじき出すことを可能とする

？の運用法の発展とも言え、デバイスの高出力形態への変形などもこれに分類される

この運用方法を成立させるには、爆発的なエネルギーに耐えうる堅牢なデバイス、通常では扱わない過剰エネルギーを魔法として制御する行使者の技量が要求される

ベルカ式魔法における、正に必殺の一撃といえる。

以上の点を踏まえてもう一度思案すると…

「そもそもミッド式でカートリッジシステムを用いる必要性が低い？」

《確かに現状ではミッド式でのカートリッジシステムのメリットよりもデメリットの方が大きいですね》

魔力運用技術は魔導師本人およびデバイスの処理能力を上げることである程度は対応できる

だがどちらにしてもデバイスにかかる負担が大きすぎる

運用方法をモニターに出して思案する

「……アレ？」

《どうしました？》

「この運用方法ってさあ、一瞬のものじゃないか？」

《どういことですか？》

「いやね、どの運用方法も一瞬でカートリッジに内包されてる魔力使いきってるじゃん」

《元々がそういう目的で作られてるものですから当然ですよ》

「何だ気付いてないのか？」

ラミアなら簡単に気付きそうなものだがまだまだ人間ほど柔軟な思考はできてないみたいだな

《気づく？》

「良いか、一瞬でカートリッジの魔力を使いきることってデバイス、術者に負担がかかるのはわかるな？」

《はい、だから今その負担をどうにかしようとしているのですよね？》

「そうだ、だがこれが中々難航しているわけだ」

《だからこそその小口径のカートリッジではないのですか？》

「いやね、負担が軽減できないのなら負担の原因を無くしてしまえ

「ばいいと思わないか？」

《まさか!?!》

ようやく俺が言いたいことに気付いたらしい

「そ、要するに『一瞬』でカートリッジの魔力を使うから負担がかかるわけだ。なら魔力を『一定時間』かけて消費すれば良い」

《危険すぎます!! 確かにその方法なら負担は少ないでしょうけど魔力制御に失敗した場合のリスクが大きすぎますよ!!》

「確かにリスクがでかいけど要は制御に失敗しなけりゃいいだけだろ」

《まったく簡単にいいますね...》

「だが、俺が思うにこの方法じゃないとおそらくミッド式でのカートリッジシステムの使用はほぼ無理だろ」

リスクは大きいけどデバイス、術者にかかる負担は制御に成功さえすれば軽いはず... 失敗するとシャレにならんけども

《はあ、わかりました。言い出したら昔から聞かないんですから...》

「流石は我が相棒よく俺のことわかってるじゃないか」

《ええ、伊達にあなたの相棒なんてやってませんからね》

とりあえずのミッド式カートリッジシステムの完成系は見えてきたあとはいかにしてそこに行くかだ

「やはり専用のプログラムが必要だよな」

《カートリッジシステム本体はある程度の改修で問題ありませんね》

「とはいえ、カートリッジ使用するたびに専用プログラム流すとかストレージじゃ難しいよなあ」

《ストレージデバイスには不向きですね、供給魔力適当量の繊細なコントロールは臨機応変に行わねばなりませんし》

さて、ここで供給魔力適当量について補足しておこうと思う

本来魔法には供給魔力適当量というものが存在する。これに満たない魔力では十分な魔法効果が発現せず、それが過剰であっても操作や制御を失ったり、過剰魔力の無駄、最悪暴発の危険性すら孕むこととなる

よって、余剰魔力分も効果的に発現できる術式、あるいは制御しうる術者の技量が必要不可欠となるというわけだ

何故この魔力適当量をコントロールするのにストレージが不向きかというと

いかに専用の術式プログラムを用意したとしても術者のその日の体調、使用魔法による魔力適当量はある程度均一とはいえ若干ながらバラつきがある

一々術式プログラムをカートリッジ行使するたびに微調整していくのは非人格搭載型のストレージデバイスでは難しいのである

無論、術者にそれだけの技量があるのなら問題はない。

「でも一般局員が使用しているデバイスはストレージかあ…」

《ああ、そういえば首都防衛隊所属のミッド式魔導師もほぼ8割がストレージデバイスでしたね》

駄目じゃん

「うゝむ…」

さてさて、どうするべきか…

困ったときのマリエもんなんだが毎回あいつに相談持ちかけるのは何か負けた気がするので却下…次の定例会で話すけど

「とりあえず、ストレージデバイスとインテリジェントデバイス。それぞれ専用の物を用意するしかないな…」

《具体的な仕様はどうします？》

「ストレージデバイスに使用するものは小口径でインテリジェントデバイスは何種類か用意しておこうか…」

現状俺が求められることは管理局に所属す魔導師の戦力UPだから…

「まずはストレージ用のカートリッジシステムから仕上げる。」

《よろしいのですか？》

「何がだよ？」

《ストレージのカートリッジシステムでは術者にある程度負担がかかってしまいますよ？》

「技術なんてもんは日々進化していくもんだぜ？」

今は無理かもしれないがこの先技術が進歩していけばより負担が少ないものがつくられていくだろうし

「それにな試作品なんてもんは欠陥や欠点がお約束なんだよ」

稼働データーもなしに完璧なものを作るわけなんかないんだから…俺は過去の経験（アシユセイヴァーの不具合）から学習したんだ

《そうですか、なら少しでもまともなものを作り上げてください。私も微力ながらお手伝いいたします》

「ああ、頼りにしてるぜ相棒？」

《頼られてあげましょう相棒》

それじゃ、頑張つてまともなものを作り上げましょうか…

第7話 クロノ襲来（前書き）

お久しぶりでございます

第7話 クロノ襲来

「…よ、ようやく完成した…」

実はあの後調子に乗ってストレージ用のカートリッジシステムの設計図書きあげてしまいました。

二週間もかかったがな…

「流石にほとんど寝てないと辛いもんがあつたなあ…」

一日の睡眠時間が平均して約3時間ほどで通常の業務も行いつつの二週間はすんごくハードだったな。

《だから言つたじゃないですか!!》

「やかましい、耳元で怒鳴るな…」

流石に世界が回っている

「よし、今日は休む」

《いやいや、ここまで来たんだからがんばりましょうよ明日はお休みですよ?》

うん、でももう無理だから休む。

ゼスト隊長宛に今日は休むことを記したメールを送信。

カートリッジシステムの設計図をマリエルに送っておく…追伸で今

日は寝るので起こすと殺すと。

「ウシ、これで大丈夫…よし寝るぞ、さあ寝るぞ」

《まったく…来客や通信が来た場合はどうします?》

「ラミアが対応してくれ…俺を起こすなよ」

うん、多分寝てる時ならだれであろうとぶち切れる自信がある

「ああ、ただスクランブルとか急ぎの用件なら起こしてくれ…」

ヤバイ、ベットに行くのも面倒だ…もおここでいいか

最近お世話になってたソファーに寝転ぶ

「じゃ、お休み…」

《良い夢を…》

ああ…ようやく寝…れる……

「お……レ……起……ん……レ……ド」

《か……て……クロ……さ……と……寝てな……んで……
……らお……待……い……さい》

…んあ？

この声は…ラミアと…クロノ…か？

少し…静かにしろ…俺はまだ…ねむ…い

「起……。レザード…！」

《ちょ、…駄目…すって…！》

………プチン

「うるせえんだよお前ら人が久しぶりに熟睡してんのに何起こしてくれてんだゴラアああ…！」

「おお、起きたかレザード聞いてくれ」

「聞こえなかったのかクロノ？」

グワアシ…！

人の安眠を邪魔するKYの頭をアイアンクローで持ち上げる。

「何故に俺の安眠を妨害してるんだ？ん？…ちゃんとお話しようや？」

「ぐわああ！？あ、頭がああ！？」

右手で掴んでるナニカがメキメキと音を立てている気がするが気のせいだろう。

《レ、レドお気持ちは察しますがその辺で…ね？》

「大丈夫だラミア、今の俺はめっちゃめっちゃクールだ…ああ、今ならきつと冷静さを欠くことなく敵を葬り去れるだろうさ」

体は煮えたぎるように熱いんだが心はとても落ち着いている…ああ、これが明鏡止水か…

今なら誰が相手だろうが負けることはないだろう

《お、落ち着いてくださいレド》

「何言ってるんだラミア？今のおれはこんなに落ち着いているじゃないか…さあ、敵は目の前だぜ？…ヴァイサーガ・スタンバイ」

《スタンバイしちゃ駄目ですう！！！！！！》

ラミアの野郎勝手にロックかけやがったなしょうがねえなあ…試作品のアイツでいいか…

「ウェイクアップ…ダ「わ、悪かったレザード。僕の配慮が足りなかった」…ああ？」

ん？ナニが喋っているな…だが…

「おいおい、KYミニクロよ…それが人に謝る態度なんですかア？」

右腕の力を増す…

「ああああ…」

「おらア、人様に謝る時はなんて言っただア？」

「…す…い…ませんで…」

「聞こえねエぞオ…三下あ？」

「すいませんでしたあ…！」

「…ったく」

イイ気分で寝てたのに起こしやがって
目、さえちまった…コーヒーでも飲むかね

「んで、俺の久しぶりにまともな睡眠時間を奪っておいて何の用だ？」

コーヒーマーカがコポコポと音を立てて黒い液体がたまっていく

「あ、ああ。実はな…」

クロノの手のひらには身分ID…

「へえ、ついに受かったのか…おめでとさん」

そこには【執務官】文字があった

「それでだ、早速君を僕の補佐としてスカウトに来た」

「ふむ…」

無造作にクロノの襟をつかみ

「帰れ」

笑顔で部屋の外に放り出した

「ラミア、俺が寝てる間になんか連絡とかなかったか？」

《マリエルさんから感謝のメールが来てたくらいですね》

わざわざ、そんなことしてなくてもいいのに変なところでまめな奴だなあ…

「ほかに「って、なんでいきなり部屋の外に出すんだ!」…はあ…」

しつけない

「良いか、クロノ。俺はお前の補佐官やるなんて言ったことは一つもない」

「S2Uの面倒を見てくれるんじゃないのか!？」

…もしかしてクロノの脳内では【俺がS2Uの面倒をみる〃クロノの補佐】とかいう公式が成り立ってんのではなからうか？

「デバイスの整備は俺がやってやるが、お前の面倒まで見るつもりはないからな？」

「だが断る！！」

「ふざけんな！！俺はデバイスマイスターなの！！前線に出張ってヒヤッハーとかするつもりはないの！」

「却下だ。僕はレドと一緒に仕事がしたい！」

「その気持ちは嬉しいけどな、俺執務官補佐資格持っていないからな？」

「よし、じゃあ、今から取りに行こう！！」

「もう今期の試験終わってんだよ！」

《ちょっと二人とも落ち着いてください！！話脱線してますよ？》

む、いかんいかん

クロノが相手だとしても売り言葉に買い言葉になるな

《はあ、状況をまとめますからね？》

「何故お前が進行役？」

《まとめますからね？》

「イエス、ママ」

恐いぞラミア

《まずクロノさんはレドを自分の補佐官にしたい、レドはクロノさんの補佐官をやるつもりはない。ここまでは良いですね？》

「そうだ」

「うむ」

《で、現状レドは補佐官の資格を持っていないのでクロノさんの要望は通らないのはわかりますね？》

「ああ」

《さらに言えば現在レドは技術士官として地上本部の首都防衛隊に所属していることもあり、仮に補佐資格を持っていたとしてもすぐにどうにかならないのはわかりますね？》

「聞いてないぞレド！！」

「お前が執務官試験近かったからあえて伝えてなかったんだよ！！」

《人の話を聞きなさい！！》

「「イエス、ママ」」

デバイスのくせに人の話とか…《レド?》

「ナンデモナイヨ」

《コホン、話を戻しますが。レドは現在技術部からの依頼により研究から手が離せません》

「ああ、まだ2、3年はかかるな…」

《では、こうしましょう。これから模擬戦を行いましょう》

「模擬戦?」

《ええ、この模擬戦にレドが勝てばクロノさんはあきらめる。クロノさんが勝てばレドは今の研究が終わり次第クロノさんの補佐官になる》

うーん、一応日々しごかれてるから体はなまってないしクロノにはまだアシュセイヴァーとアンジュルグ見せてないから勝率は悪くないんだが…

「僕はそれでもかまわないが?」

ちらりと横目でクロノをみると自信満々な様子。

なるほどねえ…今までの戦績から十分勝てると予測してるわけか。

「黙り込んでどうしたんだレド?まさか自信がないのか?」

オーケー、オーケー

クールに行こう。

これはクロノの挑発だ、俺は勝てる戦いじゃない男だ。
ニヤリと勝ち誇った顔がム力つくが言わせておけばいい

「まったく、しばらく会わない間にずいぶんとヘタレになったな、
君は…」

落ちつけ俺、横でヤレヤレなんて言ってやがるがこれはクロノの挑
発だ。

俺の方が一回り以上年上（精神的に）なんだからここは大人な対応
を…

「まあ、所詮君はデバイスマイスターで僕は執務官。結果は見えて
るからしょうがないか」

プッチン

《あ、切れましたね》

「上等だこのチビ、誰に喧嘩売ったかわからせてやる」

「ふん、君こそ僕に勝てると思っているのか？」

「そつちこそ油断してたと言わせんから覚えておけよ」

《では、日時と場所はどうします？》

「本局の訓練施設を抑えておこう」

《時間は？》

「明日、15時でどうだ？」

「ああ、それでかまわない」

《ルールはどうします？》

「時間無制限一本勝負…勝敗はどちらか気絶するか負けを認めるまででいいな？」

「いいね、どうせならとことんやろっじゃないのよ」

「じゃ、今日のところはこれで帰るよ」

「おう、首洗って待ってやがれ」

トントン拍子で話が決まりクロノはそそくさと出て行った。

「…やっちゃったあ…」

Orzの状態で安易な挑発に乗ってしまったことに今更ながら後悔である。

《まあ、早い段階で白黒はつきりさせないからそうなるんですよ？》

「自業自得ってか？」

さて、こうなっちまったからには明日は絶対に負けられないわけだが…

「ラミア、現状でクロノとやり合って俺の勝率は？」

《良くて8割です。クイントさんやゼスト隊長との模擬戦でレドも強くなっているとは言えクロノさんも執務官試験に合格しているという事ですから実力は上がっていると思われます》

「…となると厳しく見て5割ってところか…」

はあ…

「ラミア、カートリッジシステムのプロテクト外せ」

《却下です》

「良いから明日だけでもいいからハ・ズ・セ」

《ダ・メ・デ・ス》

「俺は明日の勝負負けるわけにはいかないの、分の悪いかけは嫌いなわの！！」

《まだ15歳になってないから駄目です！！》

「明日だけでいいから」

お願いしますラミア様

《……………はあ、言いだすと聞かないんですから。アンジュルグ、ヴァイサーガ、アシュセイヴァーでそれぞれ1マガジンずつです》

「もう一声」

《駄目です、1マガジンだけです。それ以上の使用はリンカーコアと肉体に負担が大きいから駄目です》

使えるのはそれぞれ5、4、8発ずつか…ヴァイサーガはともかく他の2機はカートリッジ使わないと火力不足

アンジュルグは特に燃費が悪い…

基本はやはりヴァイサーガによるクロスレンジで戦うしかない…がクロノはそこを読んで俺を近づけようとしなないだろうなあ
魔力量は俺の方が多いいけどその分俺の方が燃費悪いし…

「さて、どうしたものか…」

結局夜までいろいろと考えつつ模擬戦の当日を迎えた

第7話 クロノ襲来（後書き）

感想・アドバイスおまちしています

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3827/>

魔法少女リリカルなのは～目指せデバイスマスター～

2011年12月21日11時48分発行